

主は皆さんとともに。また司祭とともに。

松永敦神父

今月初めに黙想会がありました。日本カトリック神学院の白濱院長様を講師にお迎えし、3日間にわたって、「典礼と司祭」というテーマで講話をして頂きました。典礼の言葉と儀式は何世紀にもわたって練られてきたキリスト理解を表しているということから講話は始まり、ミサの中でたびたび登場する対話句など、普段何気なく唱えている文言にも深い意味があることを教えて下さいました。たとえば先ほど挙げた対話句の日本語とラテン語は以下の通りです。

主は皆さんとともに *dominus vobiscum*

また司祭とともに *et cum spiritu tuo*

「また司祭とともに」のラテン語を直訳すると「またあなたの霊とともに」となります。典礼秘跡省の説明では「あなたの霊」とは叙階の恵みを受けた者を意味するようです。だから、日本では司祭と訳されています。

聖書を見ると、この対話句と関連する箇所のひとつとしてルツ記が挙げられます。ボアズが自分の農夫たちへ「主があなた達と共におられるように」(2章4節)と語る場面です。新約聖書だとルカ福音書の大天使ガブリエルがマリアへ「主があなたと共におられる」(1章28節)と告げた場面が挙げられるでしょう。どちらの箇所でも、主がともにいて、そして働いて下さるのだと言っているのであり、心強い言葉ではないでしょうか。これらの箇所からも分かるように、対話句によって表そうとしているのは、キリストが中心であるということです。キリストが中心であって、信徒と司祭はそれぞれの立場でミサの奉仕をします。

ミサの中でこの対話句がある箇所を挙げると、まずは開祭の時になります。2回目は福音朗読の前です。ミサは大きく分けて、ことばの典礼と感謝の典礼から成り立っていますが、ことばの典礼の頂点は福音朗読です。説教ではありません。3回目は感謝の典礼の奉献文の前の箇所です。そして、4回目は平和の挨拶の前になります。最後の5回目は閉祭の派遣の祝福の前になります。ミサの中でも大切な個所にあるこれらの対話句は、これから行われることは他でもない主キリストが行われるということを信徒も司祭も確認しあうものなのです。

以上が黙想会で学んだことの一部ですが、毎週、毎日捧げるミサのひとつひとつの言葉や所作に意味があります。ひとつひとつを丁寧に心を込めてともにミサを捧げてまいりましょう。